

宮古の植物方言名について (2)

川上 勲

はじめに

同名のタイトルで昨年度の紀要に書いた。それと区別するため (2) とした。

文中では方言を多用した。宮古の若者世代の人たちの間ではほとんど方言は話されなくなった。すたれていく方言に対する愛着からである。なお、できるだけ平易な文で、中高生の生徒でも分かるよう心がけ、語句や用語で難しものはその場で説明したり、かっこ内に読みや意味を付け加えたりし、簡単に理解できることを心がけることにした。そのことは昨年度と同じである。

I モロコシソウ

1) ニフニズィ (宮古全域) : ニは「煮」、フニズィはミカンの方言名。ニフニズィの意味は「煮るミカン」となる。筆者はニフニズィは蒸した後、乾燥させて使うと聞いた。蒸すより湯に通す方が簡単である。試しに湯がいてみたが強い臭いは出ている。もし、「蒸して使う」意味なら方言は「ンブスフニズィ」となっていたはずで、実際はやはり煮て使ったのだと思う。また、植物標本を作るときのように急速に乾燥させた時の方がさらに、香りが強く出ることと比較して分かった。

方言の中の「ニ」は「煮」で恐らく、蒸すにしろ、煮るにしろ、熱を通してから使用することからきている。「フニズィ」はミカンの意味以外にはない。ミカンは生食の果物でそのままだと「煮るミカン」となってしまう。これでは方言の意味することが不明である。ここでのミカンは昔からあるミカンのヒラミレモン (シクワシャー) である。ヒラミレモン (シクワシャー) の特徴は「酸っぱい」という他には香りが良いということがある。皮をむくと特有の強い芳香を放す。ここでのフニズィは「香り」、「臭い」という意味に使われていると考えられないだろうか。すなわち「煮る。ミカン」で2つのことを示し、「煮ることによってミカンのように強い香りを放す草」の意味になり、その製法まで方言の中に示している、めずらしい例と解釈できないかというわけである。では、どのようにして蒸したり、湯がいたりすることを知ったのでしょうか。ニフニズィはそのまま放置して乾燥させても、近づくると他の草とは違って特有の臭いがある。その臭いを強く出させるのに熱を加える工夫を思いついて試してみただろう、と推測することは可能である。

ニフニズィは武士や役人たち (mamyaの伝説によると 18 世紀頃) が着物にはさんで香水の代わりに、男女問わず使用していたようである。民謡にも「mamya (保良という集落に生まれた伝説の美女の名前) はニフニズィの臭い、自分の女房は子どものおしっこの臭い」との一節がある。昔は水は井戸やウリ井 (うりが一、鍾乳洞の中に階段をつくり降りて行って水をくむ

所)から桶に入れて運んだ。その労力はたいへんなもので女や子どもにとって重労働であった。筆者も小学生(昭和28年~34年)の頃は役目の一つであった。貴重な水は飲み水や料理に優先し、洗濯や行水にはなかなか使えなかったであろう。たぶん、武士や役員等は使用人にさせていただろうが、現在のように贅沢に水は使えなかったことは想像に難くない。体を洗うのも濡れタオルで拭くくらいだったかも知れない。その分、体臭をカバーするため、このニフニズイは常用品であったかも知れないということである。庶民は働くことに精一杯でそれをつけて優雅に遊ぶ習慣はなかったと思われる。庶民は家の入り口に吊して蚊遣りとして使ったり、着物と一緒にいれ防虫に使ったりしていたようである。今は防虫剤は安価な製品があるが、昔はそれも無かったわけで、重宝したはずである。もし試しに使いたい場合は、年に1回交換することを忘れないようにしたい。湿気を吸ってカビが生えると、効果がないばかりか衣類を傷めてしまうからである。

どんな臭いかは表現しにくい。特有の臭いで一度嗅いだら、臭いだけでニフニズイと当てることができる。人によって感じ方はいろいろで、本土の女の学生は「カレーの臭い」と表現していた。また、鹿児島県の図鑑では、長期間に渡り漢方薬のような香りがするとある。要するに、臭いは強いものの、花の芳香とはほど遠いもので筆者はいいにおいとは感じない。しかし、枯れて長い間、臭いを発するものは、これしかなくこれしか使えなかったと思われる。



写真1 ミカンの葉に似たモロコシソウ(2月)

ニフニズイは鉢植えしても良く分枝し成長は良い。1年以内に黄色い花をつけ、長い果柄の先に白い実をつける。白い果実は熟すると自然に割れ、辺りに黒い小さな種子を散布する。そして、簡単に発芽し周りの地面や鉢の上で成長する。育てやすい植物である。恐らく、昔の人は家の周りに植え利用していただろう。宮古の野生種は個体数は少なくすぐには見つからない。場所も限られている。半日陰の林床で雨水が集まりやすく、しばらくは湿り気の続く場所や湧水のある所、そこから流れる小川の周辺などに見られる。

モロコシソウを含めたサクラソウ科の研究をしている国立科学博物館の研究者K氏は平成20年の3月に宮古島での植物採集を行った。ついでに大野山林と宮原から株を取り持って行った。その時に次のような話をしていた。モロコシソウは台湾からフィリピンに分布する種類は、2倍体(通常の染色体数)で八重山~日本本土(北は千葉県まで分布)のものは4倍体(2倍体が倍加したもの)である。それは、形態にも現れていて、4倍体のものは茎にスジの

ような翼が走る。そのため、茎が角張っている。2倍体のものはそういうことはない。宮古の個体を見るまではどっちなのかワクワクしたと話していた。例にもれず4倍体であったようだ。

モロコシソウは天野氏（昭和54年）の本によると、アンダグサ（沖縄の田港）、アンダグスイ（沖縄の奥）、カバクサ（奄美大島の名瀬）、カバシキョクサ（奄美大島の名瀬）、ヤマクニブー（沖縄の首里）、ヤマクネーブ（沖縄の国頭）、ヤマクリブ（沖永良部）、クニンバー（久米島）などと呼ばれる。「アンダグサは油草の意で葉が油ぎって見えることに由来」とある。確かに観察すると緑が濃く、光沢があり一見すると油を塗ったようにも見える。宮古では「香ばしい」の方言が「カバス」ということからカバクサ、カバシキョクサは「香ばしい草」の意味が想像できる。ヤマクニブー、ヤマクネーブ、ヤマクリブはヤマは「山」、クニブー、クネーブ、クリブは下記に示すようにミカンの方言名である。それらは、「山ミカン」と訳される。クニンバはクニンがミカン、バは「葉」と思われるから「ミカンの葉」の意味である。

ヒラミレモン（シクワシャー）の方言名はクニブ（奄美大島、与論、沖縄）、クネブ（おもしろそうし）、クリブ（沖永良部）がある。また、「ク」と「フ」は50音表で「行」は違うものの、同じ母音の列に属し、転訛しやすい。宮古では「ク」は「フ」に変化している。例を上げると、



写真2 鉢周りに自然散布され庭に発芽したモロコシソウ

くさ（草）は「フサ」、くそ（糞）は「フスウ」という。スウは「そ」が音韻変化（前の発音につられてより発音が簡単になるよう変化していくこと。方言ではよく見られる。）したものである。同じように「ク」が「フ」に変化して、クナブがフナブ（竹富）、クニンがフニン（石垣）となる。宮古ではフニュー（宮古島池間）、フニズィ（宮古全城）と言われる。いずれもクネンボが元になっている。これらの方言名はいずれも「九年母（くねんぼ）」から転訛したものであると天野氏は述べている。クネンボ（九年母）はミカン科の樹木で、果実を取るために実際に栽培されている。同時にミカンの方言名にもなっている。モロコシソウは九州の図鑑によると、九州各県の近海の林内に自生しやや稀であること、鹿児島では昔は虫除け等に用いたなどある。沖縄の他の地域や他県でも乾燥すれば臭いを出すことは知られているが、宮古のように体に付け、香水の代わりに使用したとは見られない。

上記の方言名にヒントを得て、モロコシソウの葉を観察すると葉の大きさや形、色や光沢が

ヒラミレモン（シクワシャー）の葉に似ていることに気づく。クニンバー（久米島、ミカンの葉）はそれに因んで付けられたものであり、ヤマクニバー（沖縄の首里）などの「山ミカン」の意味も「山にあってミカン葉に似た草」の意味と解釈される。すなわち、これらの方言名では臭いには感心がなく、葉の形にこだわっていることがわかる。

宮古の方言名についても、ニフニズィのフニズィは「ミカンの葉」の意味であると解釈すると意味が通じるようになる。すなわち、ニフニズィの意味は「煮る。ミカン」ではなく、「煮て使うミカンの葉に似た植物」だと結論づけられるのである。

II メドハギ

1) ヤマグヌタムヌ（宮古島市佐良浜地区）：ヤマグは怠け者，タムヌは薪（まき）の各方言名。意味は「怠け者の薪」である。昔（戦前から戦後 20 年くらいまで）の宮古ではどの農家にも農耕馬がいた。筆者が高校生（昭和 36 年～ 38 年）の頃は男児の仕事は「ヌーマヌフサカズィ（馬の飼料取り）」で野原や畑の畦から飼料となる植物の葉を鎌で刈り集めて家に運んでいた。それは、ほとんど毎日のことである。畑の隅には必ず小さな「ヌ（「野」を当てるが「耕地以外の草原」の方言名）」があり、農作業の間の繫馬場（けいばじょう，馬をつなぎ止めておく場所）として必要であった。そこにはチガヤが主に生え、周辺



写真3 メドハギの花（8月）

にメドハギが生えていた。やや広い繫馬場では馬の縄が届く範囲はチガヤが生え、そこからはずれるとススキやメドハギ，サキシマボタンヅルやノアサガオなどがあつた。チガヤは馬の好物の一つであつた。チガヤは馬の過度の食害や踏圧に耐え，地下からすぐ芽を出し，成長は早く，他の植物よりよく適応している。メドハギは茎が木化して硬く，馬は好まなかつた。馬の歯では，ちぎったり，咀嚼（そしゃく）したりが出来ない堅さであり，草本というより灌木である。馬は新芽の部分だけ食べ。ほとんどの植物体は残された。こうして，だんだんメドハギの面積が増えていき，どこにでもあつる植物の一つになっていく。「薪取り」（方言名はタムヌシーと呼んだ），「水汲み」（ここでは水源から家に水を運ぶ作業のことで方言名はミズフン），「飼料集め」（方言名はフサカズィ）の 3 つは家族に取つて，重要で，一時も欠かせない仕事であつた。戦後 20 年位までは宮古の小学生以上の男女の児童はそれぞれの体力に応じて重要な担い手となつていた。日曜日のお昼頃，農道をよくオーダ（専用の大形の畚（もっこ）の方言名）

に結わえられた「薪の山」が動いているのが見えた。男児の姿は薪のかさに隠れて見えぬ薪だけが移動して見えていたのである。「よく働くいい子だ」と通る大人から声をかけられていた。煮炊きに使う燃料を薪だけに頼っていたその頃は、枯葉、枯れ枝、雑草にいたるまで村全体からすれば常に不足がちであった。タムヌ（薪（まき）の方言名。樹木にかぎらず可燃な植物全体を意味する）はンギヤマ（アダン群落が広く被う丘陵地帯の方言名）に深く入らないと多く取れない。誰もが取れる所は取り尽くされているのである。勤勉な人は山のようにンギノパー（アダンの落葉）や灌木の枯れ枝を集め、体が隠れるほど（枯れているから堆積が多い）の量を肩にかつぎ家に運んだのである。

怠け者は出来るだけ楽しんで目的を果たしたい。どこにでもあるメドハギを刈り取り、枯らして薪にする。苦勞なく目的を果たしたい怠け者が考えそうなことである。そういうことを見聞きして、ヤマグヌタムヌの名は付いただろうと考える。また、ヤマグ（宮古島市佐良浜地区、怠け者）の畑は速やかにチガヤに被われ、メドハギ群落広がってくる。ヤマグヌタムヌの名は「怠け者の畑に生える」ことも意味したかも知れない。メドハギは葉が細かく枯れてからも互いに密になっているため燃やすと煙を多く出す。また、湿気やすいため火がつきにくい。タムヌとしては質が悪い方である。しかし、当時は慢性的に不足の状態であるため贅沢は言えなかった。



写真4 草地に広がったメドハギ群落

ヤマグの方言名は宮古島の3地域で別の意味を持っている。佐良浜地区では前述のように「怠け者」の意味。旧平良市街では「けちんぼ」、宮古島市久松地区では「泥棒」の各意味がある。久松でもヤマグヌタムヌと同名の植物方言名がある。意味は「泥棒が使用する薪」である。サルカケミカンがそうである。サルカケミカンは陽性のツル性灌木で早く伸び、他の植物の陰にならないようにしている。そのため、茎は蔓状に伸び逆向き（伸びる方向にたいして向きが逆）の鋭い棘で他の植物を伝い、常に日光に当たるようにしている。そして、成長を速くするため、木化した茎は材が荒く多孔質になっている。乾燥するとよく空気供給されて煙りを出さずに燃える。泥棒が野宿するときを使い、なかなか捕まらなかったとの言い伝えから「ヤマグヌタムヌ（泥棒の薪）」の方言名になったというわけである。同じヤマグヌタムヌでも両者はタムヌ（燃料）としては全く対照的な性質を持っているのである。これら、2種については筆者（昭和62年）が他の冊子で書いてあるため、ここでは割愛したい。

2) ヤスルパギ (宮古全城) : ヤスルは「一反 (992 平方メートル)」のこと。パギは「ハゲ (禿)」の方言名。そのままの意味は「1 反禿 (いったんはげ)」となる。ズ (土地) がパギル (やせる) とは「土地が肥料不足でやせ, 不作になること」。これが生えている土地はやせいでいくのだろうか。しかし, マメ科でこれも根粒菌を持っているはずで土地は肥えるはず。よく意味が通じない。農家の方や友人らと,このような話しをし, 長い間疑問であった。最近になって「パギ」はハギ (菥) が方言化したものではないかと解釈したところ, 意味が通じるようになった。メドハギでも分かるように後ろに菥 (はぎ) とついている。花を見ても典型的なマメ

科特有の蝶形花で小型だが菥の花と同じである。ヤスルは何を意味するだろうか。ヤスルは面積の「一反」の意味だが「広い土地」の代名詞にもなっている。ヤスルズ (広い土地) に生えるハギはメドハギ以外はない。そのことから「ヤスルパギ」の方言名になったと思われる。では, ハギ (菥) のような大和名 (和名) がどのように方言に取り入れられていく



写真5 ハマボスの花 (2月)

のだろうか。方言の名詞は本来, ものを区別するためのもので他のものと区別し, それを指し示すことが出来れば, 何でも取り入れられる。何気なく誰かがいったことが方言名となり流布するということもよくある。例えば「ハウレンソウに似ていて, 外来 (アメリカが代名詞になっている) のものらしい」というのでアメリカハウレンソウ (サンカクハゼラン) と名がついたりする。要は何かを指し示し, 他の物と区別できれば何でも方言になりうるのである。和名が方言になった例としては, たとえばサルカギー (サルカケミカン) やクロタリヤがある。サルは宮古にはいないからサルカケミカンの和名から来ていることにまちがいない。クロタリヤはインド原産のタヌキマメの仲間である。休耕地に緑肥として, 平成に入ってから盛んに栽培されている。方言名はクロタリヤで言いやすいようにラが抜けて方言名になっている。誰かがハギの仲間だと言えばハギが方言名になり, 言いやすいように変化してパギになったと考えるのに無理はない。

メドハギはお盆の時に神様への供え物 (宮古ではお盆の3日間は朝昼晩, 取り替えながら仏壇の仏に食事を供える) に添えるお箸として使う文化がある。迎え日にはメドハギでこさえた「神のお箸」は市場で市販されたりする。これはどのようにして, 習慣になったのだろうか。メドハギは木化した茎が細く硬い。それは野良仕事の折, 弁当のお箸 (はし) として適してい

る。宮古では戦前から戦後にかけて、農家の誰もが貧しかった頃、さつま芋（いも）とみそだけの弁当は普通であったらしい。メトハギのお箸に摘むものは味噌だけで時に、周りの雑草のアキノノゲシやノビルなどを絡ませて食べたと話す。畑仕事の労働はきついし、食べ物は貧しい。誰もが早く老けていったという。お盆の時に供えるお箸は、普段自分たちが使っているお箸は使いたくない。あの世とこの世のものは区別したいとの感情からである。人々は野良仕事が終わりに、家路につく前に神様を迎えるに当たり、お箸として



写真6 サルカケミカンの熟果（5月）

自然にメドハギをこさえて持ち帰っただろうと思う。その習慣が文化として定着したのである。下に示すように奄美や沖縄でも神棚に供えるお箸の文化があることは、方言名から分かるがこの考えは宮古の地域でなくても当てはまる。

宮古以外のメドハギの方言名ではショウリョウバシ（奄美大島の笠利・名瀬）、ソローウメジ（久米島）は「精霊箸」の意味、ソーログサ（沖縄の久志・首里）は「精霊草」の意味。奄美と沖縄各地で精霊の箸（はし）や箸（ほうき）の意味の方言名がある。一方、八重山各地ではマヤーブ（石垣、波照間）、マーヤーブー（石垣、竹富）と呼ばれている。意味はいずれも「猫の尾」の意味で直立する枝の形が、猫が尾を立てているのに似ているところから付いている。

Ⅲ ショウジョウソウ

1) ユウレイヌカガム（旧平良市街）、マズムヌカガム（旧平良市街）：ユウレイは「幽霊」、ヌは「の」の格助詞、カガムは「鏡」で、ユウレイヌカガムは「幽霊の鏡」の意味。マズムヌは「化け物」の意味だが、時には「幽霊」の意味にも使われる。一方、ユウレイには「幽霊」の意味しかない。マズムヌカガムは「化け物の鏡」、「幽霊の鏡」の意味である。

ショウジョウソウは北米原産の多年草（本土では一年草。冬の低温により枯れるため）で高さ1mほどに直立する。始めは単立であるが古い株は根に近い方から枝を出す。クリスマスの頃、花屋に並ぶポインセチア（ショウジョウボク）は木本であり、これはその草タイプでよく似ている。ショウジョウソウは同株中でも葉の形は、幅の広いものから細長いものなど多形であるが普通、10cmほどの長楕円形である。鋸歯（きよし、葉のふちがのこぎりのようにギ

ザギザになっていること)はないが、大きな切れ込みがありバイオリンの形にくびれる。葉、茎ともに濃い緑色で傷つけるとすぐに白汁が出る。茎は中空で若い茎は指でつぶせる柔らかさである。白汁は有毒のため、どの家畜も食べない。昔は刈り取って枯らし、燃料にしていた。

花は小型で数mm程度。茎の先端に集まって着き、緑色をしている。宮古では暖かいせいで年中開花結実する。冬の2月にも花は見られた。花が目立たないため、花の周りの葉が鮮紅色になり虫を引きつける役目をしている。よく観察すると赤くなっている葉に2種類ある。花序(かじよ、花を付けるための枝)に付いている小型の葉で包葉と呼ばれるものと、茎の最上部の葉である。包葉は小型で大部分が赤い。それに対し最上部の葉は1/3ほど、葉の付け根部分が赤く、2種の赤い部分は大きさはそろい、放射状に並ぶのでまるで、1つの花の花びらが開いたように見える。アカバナギー(旧伊良部町南区、宮古島市久松地区)は「赤い花の草」の意味でそこから来ている。花をまだ付けない成長期の若い枝の葉は赤くならないことから、虫を呼び寄せるために赤くなることはまちがいない。時折、赤い部分が白くなっている個体を見ることがある。日陰になっている所のものがそうらしい。生花にして20日も過ぎているのにまだ青々としているものがある。

長持ちしているのは冬の気温のせいもあるだろう。しかし、ほとんどの赤い葉は脱色して白い。残っているものもわずかに赤いだけである。やはり、窓際に生けてあるとはいえ、光量の不足によるものと思われる。考えて見ると、白は明度が高く、薄暗い林内ではかえって赤い色よりよく目立つ。日陰では、虫を有効に引き寄せるには赤い鮮紅色より白色の方が良いというわけである。



写真7 バイオリン形のショウジョウソウの葉(3月)

ある。ショウジョウソウは虫を引きつける作戦の元に積極的に脱色していくのである。試していないが日光に当たればまた、だんだん発色していくのではないかと思う。

猩々(しょうじょう)は中国に棲む想像上の動物で体色の赤い、サル仲間である。ショウジョウトンボ、ショウジョウバエはいずれも体色が赤い。そのことから生物の名が付くとき、赤の象徴として使われているのがわかる。「猩々草(ショウジョウソウ)」は葉が赤く目立つところから来ている。

方言名の意味を考えてみよう。まず始めに、なぜマズムヌヌ(化け物の)と付いたのだろうか。それは簡単に分かった。他にもマズムヌヌとつく生物の方言名があり共通するものがあるためである。マズムヌヌと付くときは生物の色又は形態が「異様である」、「普通でない」、「忌

み嫌いたい気持ちを起こす」,「毒々しい」など,生物の色や形から受ける印象によってついでいる。それは多分,本能的なものと思われる。筆者が小学生のころ藪(やぶ)に入り,毒々しい原色のオキナワスズメウリの果実が鈴なりにになっているのを見て,ドキッとし気味悪く思ったからである。ショウジョウソウの葉の怪しいほど鮮やかな赤色は緑しかない地味な放棄地,林縁などの生育場所では,異様な鮮やかさであり,普通でない,忌み嫌いたい気持ちになるなどの感情を起こし,マズムヌヌ(化け物の)やユウレイヌ(幽霊の)となったのである。マズムヌヌとつく方言名の例はいくつかある。マズムヌヌスイカ(旧平良市街,オキナワスズメウリの果実,化け物の西瓜),ドクスイカ(旧伊良部町の児童生徒,オキナワスズメウリの果実,毒西瓜,実際には毒はない)は,オキナワスズメウリの果実が鮮やかな赤い色に白い線が描かれ西瓜(すいか)のように見えることからそういう方言名になっている。また,色が原色で毒々しく見えることからドクスイカとつく。マズムヌヌパナ(旧平良市街,リュウキュウトロアオイ,化け物の花)は大きな黄色い花が野生にあることから「マズムヌが見るための花」だと方言名がついた。マズムヌヌチダイクニ(旧平良市街,ヤブジラミ,化け物のニンジン)は植物全体は人参にそっくりだが根は普通のもので,人参のようではないのでそういう名がついた。マズムヌヌフウズキギー(旧平良市街,コフウセンカズラ,幽霊のホウズキの意味)。フウズキはセンナリホウズキの方言名。センナリホウズキに比べて小型のホウズキが妙に数多くつき,ツル状に伸びて繁茂も早い。センナリホウズキとは印象が違うことに人々はそういう方言名をつけた。また,城辺ではマズムヌヌフサ(幽霊の草)という。



写真8 オキナワスズメウリの熟果(2月下旬)

動物にもその異様さ故にマズムヌヌと付いたのがある。マズムヌヌファミラ(旧城辺町,オキナワナナフシ,化け物の子守り役,又は幽霊の子守り役)。ファミラは「子守りする人」のことで今でいうベビーシッターのことである。枝の下側にぶら下がり時々,「揺れるように動く」様が子どもを背中におんぶして体を横に動かしてあやす,昔の女兒のようだと見立て,異様な形態をしているので「幽霊の子守り役」と名が付いたのである。また,マズムヌヌカタブニ(宮古島市鏡原地区,オキナワナナフシ,化け物の肩の骨)も枯れ枝のような形態が肩の骨のようだと見立ててついでいる。キーマズムヌ(旧平良市街)はそのまま「木にいる化け物」又は「木でできた化け物」の意味である。ナナフシにはかわいそうな方言名が広く付いている。しかし,中には,キーサートゥ(宮古島市久松地区,オキナワナナフシ,木を住み家としているカマキリ(サートゥが方言名))のようなものもある。

カガミ（鏡）の部分はどうしてでしょうか。なぜ、「マズムヌヌアカバナ（幽霊の赤い花）」などと言わず鏡なのでしょう。幽霊はショウジョウソウの葉を取り、霊力で鏡に変えて自分の姿を写すのでしょうか。鏡にするには葉の大きさが小さいのではないか。凸面鏡にすれば写せないこともない。鏡にしたい大きな葉はいくらでもあるのになぜでしょうか。などと考えたりして長い間、疑問であった。人々はなぜショウジョウソウを見て、いろいろの品物がある中で、取り分け「鏡」という品物にしたのでしょうか。そして、ある日赤い色と鏡とは深い関係があることが分かった。以下に述べるように人々はショウジョウソウの葉の赤に鏡の赤を見ていたのである。

鏡の製法は 19 世紀にガラス面に銀を沈着させる方法（銀鏡反応）が発見されて以来、今も変わっていない。今でも銀を使うのは金属の中で可視光の反射率が最大であるためだという。銀は空気中のわずかな化学物質（イオウやオゾン）に敏感に反応し化合物をつくる。そのため、銀メッキと同時に酸化防止のための塗料をぬる必要がある。今は塗料の工夫により鏡の耐久性が向上し安い鏡でもめったに曇った物は見たことがない。筆者が小学生の頃のもののはただのガラス板に「赤い塗料」をぬり、金具を両辺につけスタンド用の針金（はりかね）を施したばかりの粗末なものばかり目にした。すなわち、鏡の裏は一面「鮮やかな真っ赤な塗料」で固められていたのである。しかし、鏡の持ちは悪く、古くなった鏡の中にはクモの巣のような、カビのような白いものが広がっていた



写真9 コフセンカズラの果実と花（4月）

と記憶している。その赤い塗料はおそらくベンガラだと思われるが、むき出しのベンガラは傷ついたりして、空気と銀が触れるようになり鏡の中に化合物が出来たのである。ベンガラは酸化第二鉄を成分とする顔料（がんりょう、鉍物性染料のこと）で耐熱、耐水、耐光の各性質に優れ、耐酸性、耐アルカリ性にも優れているため、今でもさび止めの下地（したじ）として使われている。インドのベンガル地方から天然のものが輸入されて使われたためベンガラと呼ぶようになったという。ベンガラは漢字では「弁柄」の字を当てている。さび止めに使う市販の物は純度が悪く、赤褐色をしているが、純粋なものは赤が鮮明であるという。ショウジョウソウの赤を鏡のベンガラ色と同じと人々は感じたのである。ネットには首里城が復元された時、ベンガラ色に塗られたとあるので首里城のカラー絵を見たことのある人は、その色は想像できる。人々はショウジョウソウの葉に鏡としての機能を見ていたわけではなく、割れて同じ大きさぐらいになった鏡の破片の赤を重ねていたのである。もしかしたらショウジョウソウの草むらに鏡の割れたものが捨てられてい

て、より方言名を誘因したのかも知れない。

2) ズゥリヌピスナデギー (宮古島市久松地区) : ズゥリは「遊女」、又は「の」格助詞、ピスは「女性の性器」、ナデは「撫でる」の各方言名。ギーは「草又は木の方言名、ここでは草」。直訳すると、「遊女の陰部を撫でる草」、「遊女の性器を撫でる草」又は「美女の陰部を撫でる草」、「美女の性器を撫でる草」の意味である。実際にその草をそういう使い方をしていただけではない。ここではショウジョウソウの葉の緋色をほめたいのであり、「遊女の陰部を撫でるのに使いたいような艶めかしい色の草」の意味である。ズゥリは本来「遊女」の方言名であるが、遊女は美人であるということから「美人」の代名詞にもなっている。「何々ヤーのズゥリ」とは村人の会話に時々出る。そういう時は「〇〇家の美人」という意味に使われ、〇〇家に遊女になった人がいるわけではない。しかし、あくまでも代名詞であり「美人である」の方言名は「イイカーギ」、「ゾーカーギ」、「アパラギ」など、ちゃんとある。

この方言名は人前で話したことはない。卑猥(ひわい)な表現と思うからである。文字でなら受け手との間に距離ができるから可能である。方言名にはそういうあからさまな表現がよくある。ヒーミーフサ (宮古島市平良字西原, ハマボッス, 女性の性器を見る草), マラミーフサ (宮古島市佐良浜地区, ハマボッス, 男性の性器を見る草), ハンキヌソーラ (宮古島市平良字西原, ナワシロイチゴ, 男性性器の亀頭の先を思わせる果実をつける草), ハンキンータギー (宮古島市佐良浜地区, ナワシロイチゴ, 男性性器亀頭に似た果実をつける草), マラウイフサ (旧城辺町字砂川, ナンバンギセル, 男性性器を勃起させる草) などはその例である。



写真10 鮮やかなショウジョウソウの葉 (4月中旬)

方言の表現は具体的、直接的で、あからさまである。隠さず遠慮はない。集落での方言は機能性が高い。日常の中で必要なことだけが語られ、継承されていく。その中では具体的、直接的表現の方が分かりやすい。毎日家族や近所の決まった人と会い、交わされる言葉も限られている。気心知れた少数間では何の遠慮もいらず、性に関することも上記のように具体的でも平気である。村のような小さい社会では抽象的な言い回しは育ちにくい。抽象的な言い回しやオブラートされた表現は大衆化された文字文化(ここでは文字記号により表現され、伝えられていく文化の意味)の中で育って来たと思う。多くの人たちが集まり一般化した話をする時、特にタブーな言葉には雰囲気や秩序を保つためには曖昧(あいまい)な表現も必要である。世界

の言語は 6,000 種余りだが、数%しか文字を持ってない。記号程度の簡単な文字はあるかも知れないが、構造的で系統立てて文化や文明を記述する文字文化は発達してない。多くの言語では生活していく上で文字文化を必要としていないからである。

ショウジョウソウの色を表現したいなら「艶やかな色の草」、「艶めかしい色の草」の意味を方言で言えばすむ。ところが、「艶やかな」、「艶めかしい」と具体性に欠け、意味のはっきりしない言葉の方言名はこの村にはないのである。今話した理由からだ。そこで、「遊女の……」という表現になったのである。「艶めかしい」を「遊女の陰部を撫でる」に行き着いたのは傑作であると思う。この表現の豊かさ、おもしろさはユーモアのある、遊び心を持ったウエットな精神から生まれたものである。この表現に、村人達が自然をよく観察し、豊かな想像性や感情を持ち、健康な明るい精神を持っていることを見たようで拍手を送りたい。

ショウジョウソウは北米メキシコの熱帯地域の湿った砂質地が原産地である。日本には観賞用として輸入されている。年代ははっきりしない。近縁のショウジョウボク（ポインセチア）は明治の初め頃渡来したといわれる。今は、宮古では逸出（いっしゅつ、栽培種が逃げ出して野生化すること）して、誰も栽培していないが空き地や造成地、墓地、林縁、山道脇などに時折見られる。筆者が小学生～高校生の頃は生育地はもっと多かったように記憶しているが最近は少なくなっている。また、現在は世界の熱帯地域に広く帰化しているという。生け花にしてみたところ、確かに葉中の緑の中にある赤は適当なコントラストを醸しだし美しい。赤一色のポインセチアとはまた別の美しさである。その葉の緋色を「怪しいまでに艶やかである」と人が感じたとき上記のような、この上ない濃艶な表現となったのである。上記のような方言名はショウジョウソウの赤色に対して人々が、美しい、好意的である、身近にあってもいい、敵意を持たない、などの感情を持たないと生まれてこない。観賞用、生け花用として輸入されているから、これが自然の感情かもしれない。おもしろいのは同じ赤に対して、始めに述べたように一方では「マズムヌヌ」と「忌み嫌う色」としてとらえ、他方では「美人の色」と対照的にとらえているところである。



写真11 ナンバンギセルの花（4月中旬）

IV サキシマボタンヅル

1) ショウガツフサ（宮古島市久松地区）：ショウガツは「正月」、フサは「草」。フサは「家畜のエサ、飼料」という意味もある。ショウガツフサの意味は「正月に家畜に与える飼料」、「正

月のために取っておく飼料」の意味。なぜ、正月とサキシマボタンヅルが関係するのでしょうか。昔は正月の3日間、あるいはもっと以前は7日間、「畑に行かなかった」という。パリンカイカン(畑に行かない)は「完全に野良仕事を休む」の意味である。宮古の正月は以前は、農村にとって、盛大な祝賀行事であり家々を訪問し酒を酌み交わしていた。県内の漁村は今でも盛大である。大きい本家では初日は親戚からの訪問が終日耐えない。2日目、3日目は分家どうしや友人が互いの家を訪問し合う。正月の期間に野良仕事をするのは暗黙のうちに村の中では批難(ひなん)されることとして定着している。しかし、その間も家畜は餌を食べる。ススキやチガヤの飼料を数日分、正月前に確保するが、それはだんだん枯れていく。牛や山羊は反芻(はんすう)動物だから枯れてもエサになるが、馬は枯れたものは食べない。その時、不足分の足しにするためサキシマボタンヅルを準備するというわけである。

サキシマボタンヅルは取ってきて直ぐのものは家畜は食べない。山羊や馬、牛いずれも見向きもせず、それだけ選び残す。ところが、数日後、萎えたころに与えると食べるようになる。人々は食べ残しのサキシマボタンヅルが馬小屋の隅に放置され、それを後日、馬が食べているのを観察してそれを知ったと思われる。農家の人たちは家畜小屋の屋根の上に数日間、サキシマボタンヅルを乗せて太陽にさらし、しなびた頃、家畜に与えていたのである。それを正月の野良仕事をしない期間に行うからショウガツフサと名が付いたというわけである。



なぜにやや萎えてから食べるようになるのでしょうか。昭和40年代の終わり頃から60年代にかけて沖縄の著名な植物研究家、故天野鉄夫氏は県の緑化事業の委員長などをなさっていた。天野氏は著書も多く県立図書館には氏の特別なコーナーがあり手続きしてから入ることができる。氏のような偉大な沖縄での植物研究家は後にも先にもいない。氏は仕事で宮古島に来島する折、筆者にもよく声をかけてもらい、一緒に行動するときが度々あった。その時、氏から「サキシマボタンヅルは噛むと辛い」と聞いた。その時までそのことは知らなかったので新知識を得た。試しに噛んでみると強い辛さではないがやはり辛い。それは若い葉ほど強い。その知識をきっかけに調べて見ると、その辛い原因はキンポウゲ科の多くの種が持っているアルカロイドであり、有毒であることがわかった。長い間、なぜ、家畜は萎えてから食べるのか疑問であったが説明ができた。つまり、サキシマボタンヅル

写真12 サキシマボタンヅルの白い花(6月上旬)

は緑色のうちは辛い成分があり有毒である。家畜はその有毒成分のために食べない。数日して少し萎える頃になると酵素の働きで、その成分が分解され有毒性が失われるというわけである。もともと植物全体が皮質（葉の性質を表記する用語）でやや肉厚のため他の栄養素はあるはずである。無毒になったサキシマボタンヅルは家畜は好んで食べたに違いない。正月だけでなく、キザズィ（「行事」の方言名）や台風時など草刈りに行けない状況では非常用として役立つものと思われる。そのことを発見した人々の知恵にここでも拍手を送りたい。

はじめは黒い色に枯れてから家畜に与えていたと思っていたところ、字久貝の狩俣さんは「4・5日ナースィテ（萎えさせて）からは牛、馬、山羊は食べていたよ」と話していた。黒く枯れてからはとは言わないので試しに、まだ緑色のままのしなびた葉を噛んで見たところ、辛くなかった。枯れるという現象は細胞が死に、葉緑素が分解し茶色（枯草色）になる。サキシマボタンヅルの場合、葉緑素が分解



写真13 樹幹に広がるサキシマボタンヅル（6月上旬）

する前に辛み成分が分解することが分かった。黒くなってからのものも食べていたが、まだ、緑色の少し萎えた状態から、すでに馬は食べていたのである。

宮古島ではセンニンソウ属はサキシマボタンヅルとリュウキュウボタンヅルの2種が普通に見られる。他にはヤンバルセンニンソウの報告があるが筆者は見えてない。他に似たものにセンニンソウがあるが宮古島には分布しないようである。見分け方をみるとこの中で鋸歯があるのはリュウキュウボタンヅルだけなのでまず一つ取り分けられる。残り2つの内、乾燥したとき黒変するのはサキシマボタンヅルだけなので乾燥すれば分かる。生きたままでは葉の枚数で区別する。3種とも3枚以上の複葉を持つが3枚ちょうどのものはヤンバルセンニンソウとセンニンソウである。サキシマボタンヅルは3～7枚の小葉をもつ。3枚のものも時にはあるがまだ成長途中の葉の場合である。その時は同株の他のツルや同じツルでも古い葉などを見れば5枚～7枚の葉もあるはずである。それでも、もし、3枚の成長葉だけの株が見つければ頂小葉（三枚中の真ん中の葉）の葉柄が他の2つより最も長いので区別はできる。センニンソウとヤンバルセンニンソウの場合、3小葉の葉柄は同長なのである。これらの特徴は宮古島で注意して2種以外を探すときの参考にもなる。宮古には分布しないものの、沖縄県にはオキナワボタ

ンヅルやヤエヤマボタンヅルがある。前者は3出の2回羽状複葉で小葉は5～9枚、後者は托葉が融合しているなどの特徴がそれぞれあり簡単に見分けられる。

2) タズナズィ (宮古島市久松地区、旧平良市街、旧城辺町)、タズナ (宮古島市久松地区)、カトゥーナ (宮古島市大神) : いずれも意味は不明。タズ (宮古島市久松地区) は「ソクズ」の方言名のことだが関係あるかどうかは分からない。

3) ウコスバフサ (旧伊良部町南区)、ウコスバギー (旧伊良部町南区) : ウコは「大きい」、スバは「唇 (くちびる)」、ギー、フサは「草」の各方言名。ウコスバフサ、ウコスバギーの意味は「唇が大きくなる草」。どうして唇が大きくなるのか。辛いと関係があるのか、人の唇なのか、馬の唇なのかなど不明である。他の島の方言名の例として、天野 (昭和 54) によれば、近縁のヤンバルセンニンソウ、ヤエヤマセンニンソウは西表島ではクースカツアと呼ばれる。クースは「トウガラシ」、カツアは「カヅラ (葛) 又はツル (蔓)」の各方言名。意味は「辛みのある蔓」である、と書いてある。

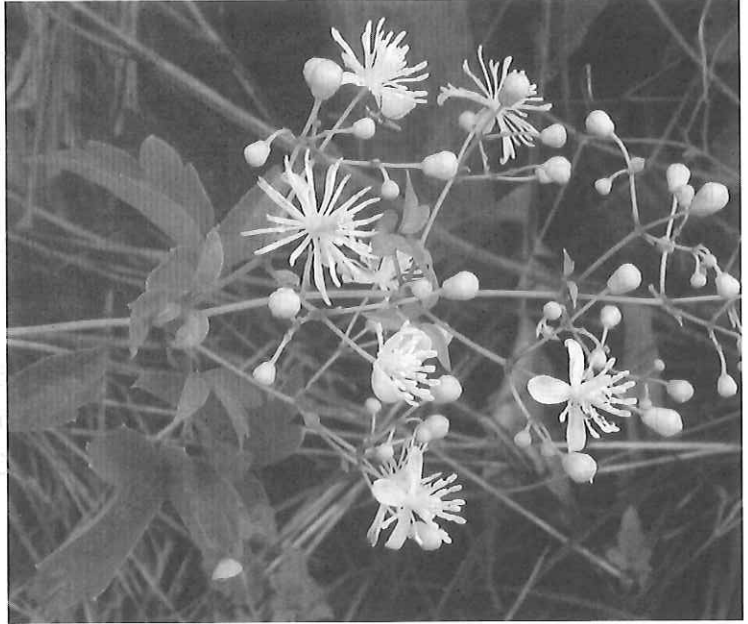


写真14 リュウキュウボタンヅルの花 (6月中旬)

タズナズィ (サキシマボタンヅル) は宮古島では梅雨の頃から6月にかけて、真っ白な花を一斉につけ、全島に季節感を醸し出す。畑の畦、御嶽林、アダン群落、ススキ群落など、いろいろな所の緑一色にアクセントを与え、遠くからでもわかるような真っ白い樹幹を見せてくれる。その時はタズナズィの存在と分布の広がりが見える。

センニンソウ属のセンニンソウは北海道南部、本州、四国、九州、沖縄の各地に分布する。日当たりの良い人里の灌木林、やぶ状疎林などに見られる。本州では7～10月に花を咲かせる。果実が出来るとき花柱が変化した灰色の長毛があり、それで風に乗って散布される。その羽毛状の長毛は3cmほどあり、それが仙人のアゴヒゲに似ると見立てて「仙人掌」となった。宮古のサキシマボタンヅルの場合も長毛は同じ長さくらいある。意外によく飛ぶらしく庭や空き地、畑の畦などに散布され、新しい個体がよく見られる。漢方ではセンニンソウの根を煎じ薬とするが有毒なので民間での使用は避けた方が良いとある。何に効くかは調べてない。宮古島にも昭和の終わり頃、日本の有名な漢方薬メーカーの男2人が来島してきて案内を頼んで来た。さすがに何のためとは聞けなかった。薬開発のためであるし、そういうのは秘密裏に進めるか

らである。個体数はふんだんにあるのに、根を掘り起こす前に必ず毎回、「これは取ってもいいか」と丁寧に尋ねていたことが印象に残っている。

宮古諸島にはセンニンソウ属はサキシマボタンの他にリュウキュウボタンヅルが普通に見られる。方言名ではアーズウ（宮古島市久松地区）又はアーツウギー（宮古島市久松地区）と呼ばれる。アーツウ、アーズウは「泡」、ギーはここでは「草」の方言名である。意味は「泡草」である。この草は生でも家畜は食べる。しかし、筆者の経験では馬に与えると唇から緑色の泡状唾液を出しながら食べる。それで「泡を出しながら食べる草」の意味で「泡草」と名がついたと思っていた。ところが、天野氏（昭和54年）の本によると、アーブクギー（久米島）、ブクブクギー（沖縄の首里）、は何れも「もめばあわが出る草」の意味と書いてある。他にも同じ意味の方言名がついているのである。

リュウキュウボタンヅルの花は真っ白でなくやや黄色味を帯びている。おもしろいことにこの両者は花期をずらして咲く。花期は後ろと前が互いに重なるものの、ピーク時は重ならない。花期のピークはリュウキュウボタンヅルの方が数週間ほど、より夏にづれこんで咲く。虫は両方の花を訪れる。虫は両方の花粉を運ぶが両方の花はそれぞれ自分の花粉しか受け取らない。続けて同じ花にいけば花粉はうまく運べて成功するが、交互にいけば失敗する。一緒に咲くと昆虫が花粉を運ぶときの効率が1/2になるというわけである。それを避けるための工夫なのである。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、貴重な情報を頂いた、郷土史研究家の仲宗根将二さん、宮古島市平良字久貝の狩俣有良さんにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

- ・ 昭和54年6月、天野鉄夫、琉球列島植物方言集、新星図書出版、沖縄
- ・ 1994年11月、初島住彦・天野鉄夫、琉球植物目録、沖縄生物学会、沖縄
- ・ 1973年11月、宮農生物クラブ（指導川上勲）、宮古の植物方言名集（農文祭資料）、県立宮古農林高等学校
- ・ 昭和62年3月、川上勲、宮古島の人々と植物、平良市の文化財、平良市教育委員会、P 92
- ・ 平成3年11月、選択2「生物」受講生（指導川上勲）、伊良部町の植物方言集（第3回学園祭資料）、県立伊良部高等学校
- ・ 1977年8月、奥山春季編、寺崎日本植物図譜、平凡社